

筒城宮伝承地

同志社大学の田辺キャンパスに入り、正門右手の小高い丘に歩を進める。そこには昭和辛丑年春の銘をしるした「筒城宮址」の石碑がひっそりと建っている。木立に囲まれ、ここだけがキャンパスの喧騒を離れた別世界のようなのである。

この石碑はもとどこに建てられていたわけではなく、キャンパスの周辺を点々とする運命にあつたものを、田辺キャンパスの新設に伴って現在地に移されてきたものである。

筒城宮（つつきのみや）とは仁徳天皇の皇后磐之媛（いわのひめ）が、そして時を経て継体天皇が営んだ宮と伝えられている。『日本書紀』によれば、仁徳天皇三〇年

玉城一枝

の秋、磐之媛が紀国に遊行して不在のあいだに仁徳は八田皇女（やたのひめみこ）を妃とする。これを伝え聞いた磐之媛は怒って難波に帰らず、山背（やましろ）の筒城の岡の南に宮を営んだ。以後、仁徳の再三の申し入れにもかかわらず、磐之媛はついに仁徳と再びまみえることなく五年後に筒城宮でその生涯を閉じたという。

一方、継体天皇は樟葉宮（くすはのみや）で即位してから五年後の冬十月、「筒城」に都を遷す。山城の国で最初の都である。以後、一二年の春に弟國（おとくに）に遷都するまで七年間にわたって筒城宮は存続する。

継体天皇の遷都の理由としては、当地に

居住していた奴理能美（ぬりのみ）系の渡来人による養蚕業に経済力を求めたとも考えられている。『古事記』には仁徳天皇が、三種に変化する奇しき虫をわざわざこの地に見学に行ったとする記載がある。この不思議な虫は、幼虫、繭、蛾と変わる蚕と考えられており、その後の当地での養蚕の発達をうかがわせている。

では、「筒城宮」とは現在のどの位置に比定できるのだろうか。

残念なことにこれまでの発掘調査や周辺の踏査でも、筒城宮の関連する具体的な遺構はまだ全く確認されていないのである。しかし、その手掛かりは現在の地名に残されている。つまり現在にのこる「綴喜」は古代の筒城宮の「つつき」のなごりをとどめたものと考えられるのである。「つつき」には古代の文献でさえも、すでに様々な字が充てられている。『古事記』では「筒木」、『万葉集』では「管木」などとあって、「筒城」は『日本書紀』に拠っている。

現在の「綴喜郡」は南山城のほぼ中央に位置している。かつての綴喜郡と比べると

北西部が八幡市、北の一部が城陽市となつたため、郡域はやや狭くなっている。

郡名の初見は、『続日本紀』和銅四年（七一）正月二日条で「綴喜郡山本駅」とある。さらに天平神護元年（七六五）八月一日条には「綴喜郡松井村」、『東大寺奴婢帳』には「綴喜郡」、『続日本後紀』には「綴喜郡」とさまざまである。

『和名抄』によると、綴喜郡は山本・多可（多河・田原・中村・綴喜・志磨・大住・有智・甲作・余戸の十郷からなっている。



「筒城宮址」石碑

このうちの「綴喜郷」こそ筒城宮の所在にかかわる地名と考えられるが、現在のところ明確な範囲は明らかではない。ただし、嘉吉元年（一四四一）の『興福寺官務牒疏』によれば、普賢寺の所在を「綴喜郡筒城郷朱智長岡荘」としている。さらに普賢寺の境内にあたる場所にあったという親山寺は天武朝に創建され、「筒城寺」といわれていたことが記されている。

現在、普賢寺跡と呼称されている場所は、田辺町大字普賢寺にあり、発掘調査でも「筒城寺」と呼ばれていた時期にかかる瓦などの遺物が出土している。『興福寺官務牒疏』にみえる「筒城郷」が『和名抄』の「綴喜郷」と同一地域を指すとすれば「綴喜郷」は現田辺町の普賢寺谷一帯に求められる。普賢寺谷は西へ抜ければ河内の国へ至る交通の要地でもある。そして同志社の田辺キャンパスを含む地域を今日でも「都谷」と呼び伝えていることは古代の栄華をあた

かも今に伝えるがごとく示唆的である。

しかし、筒城宮の位置を特定するに足る確実な史料はない。磐之媛が宮んだという「筒城宮」と継体天皇の「筒城宮」がはたして同一の場所であったかどうかさえ明らかではなく、記紀に伝える「筒城宮」は今もって謎を秘めたまま地中深く眠ったままである。

〈主要参考文献〉

『京都府の地名』日本歴史地名大系第二六巻 平凡社 一九八一

『京都府田辺町史』一九六八

同志社大学校地学術調査委員会『下司古墳群』一九八五

（同志社大学校地学術調査委員会嘱託）